



はじめに

これは芸術家を志したJという女の最期の手記である。

一九〇×年七月十二日東京都〇×市に生まれ、二十二歳の年に亡くなる。

身体が弱く、両親にやや過保護に育てられる。

Jは幼い頃から絵を描くことに喜びを感じ、十七歳の年に絵描きになろうと決心。美術教室に通い始める。

数年の努力の結果デッサンの技術を会得。講師たちの称賛を浴びる。しかし自由制作となるといまちぱっとせず、友人にも講師たちにも「写すのは上手いが想像力がない」、「人間カメラ」などと批判される。

一九〇×年、一年の浪人生活の後、日本造形大学に合格。二年生の頃、そこで出会った悪友たちに、当時合法麻薬として若者の間で流行っていた楓の葉を勧められ、毎日のようにいぶした楓の葉の煙を吸引するという遊びに明け暮れる。それからというものJはまともに大学へ行かなくなる。

一九〇×年、日本造形大学を中退。私生活は増々荒廃を極める。働く気はなかったと見えて、多くの男の家を泊まり歩きどうにか食いつないでいたようである。翌年五月九日、午後三時頃、実家の居間で吐瀉物にまみれ倒れているところを父親が発見、〇×病院に搬送され、二日間持ちこたえたが五月十一日午後五時二十五分、持病の不整脈の発作により死亡。

今から紹介する手記というのは、彼女が自宅で倒れているところを発見される数日前に泊まっていた交際相手の自宅で書かれたものである。手記はチラシの裏に記されており、Jがどうやら暇つぶしに書いた詩であるらしく支離滅裂で、難解な内容となっている。完成されているとは言えないが、想像力がないと笑われてきた彼女の作品の中で最も情緒溢れる作品兼遺品としてここに記す。

皮肉にもJは自身の文才に気付かずその短い生涯を閉じたのかもしれない。

手記

——ある川での出来事——

夕方、暖かだった陽射しも風も緩やかに冷たくなっていった。

小さな川の小さな橋の下で、四十年前の音楽を流しながら、二人の青年は小石を仄暗い水面に投げ入れていた。沈む小石はその度に自身の何倍もの高さに雫の柱を建てた。それらはたちまち粉々に崩れ落ち、跳ね上がり、また川底に戻っていった。小石のうたう川辺の歌の優しいこと！そして、儂いこと…。

月は蘇り、空は薄い雲と淡い紫の線を描いた。蝙蝠は目を覚まし、巣へ帰ろうとする鳥や雀や鳩よりもいくらか、空腹に慌てている。

春から芽を出した野草は昨日よりも背を伸ばして、星々の隙間から吹いてくる風に、嬉しそうに身を震わせている。

あなたは、それらを指差して私に一日を教えようとしている。特別、雲について。

今日も太陽が一周した。椋鳥のさえずりが遅れて、遠くに、何度も消えていった。

——民家の奥の公園で、私は酷い悪寒と息苦しさに身体を震わせていた。湿っぽくへばりついていた恐怖は、今や乾いて私の一部となっていた。そこでは月は見えなかった。

花壇に生えるつつじの枝葉とそびえる樹の影は何も語りはしなかった。人工の木漏れ日を、大きすぎる木琴に横たわり、私はただただ見つめ続けるしかなかった。筋肉、骨、皮膚は痙攣、収縮し、死に向かって石のように固まっていった。呼吸は荒々しく、やはり固まっていくようだった。

暖かなのは、唯一自分の涙だけであった。

あなたは、あなたの体で私の体を包み私を温めてくれていた。

骨張った樹の向こうにある無機質な白い灯りは、私の、何かであった。語りはしないが、伝わるような気がした。魂を抜かれる白い底抜けの心地よさと戦慄が私からその光に繋がっていた。

「死にたくない...死にたくない...」

あなたは、大丈夫と言った。

白い灯りは私を怪しまず、疑いもしなかったが、手を差し伸べることはなく、冷たかった。そこに有るばかりであった。

あなたも、そこに有るばかりで、心配そうにしかし冷静に立っていた。

私は二層の不安の先に冷静な私を見、どれも私であり私でないことを見出し、離れていく生命力を弱々しく掴むのみであった。

私の友人Kに宛てて 一九〇×年 五月

才能がない女の手記の断片

<http://p.booklog.jp/book/85908>

著者：大きな水

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ookinamizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85908>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85908>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ